

## 第六章 鎌倉一比企谷殿

早い朝餉を取っていると、給仕していた仲居が言った。

「郷姫さまを一目見ようと、入り口で十数人の人がもう出立を待ち構えているのですよ」郷子は、河越館で領民が見送ってくれたことには感激したが、この国府で自分の出立を多くの人々が関心を持って見守ることは理解できなかった。

「なぜでしょう」

「それは、いま都で大評判の若くて美貌の持ち主。それでいて稀代の戦略家で一の谷の合戦の英雄義経さまの正室になるお方がどのような姫君か関心がないわけがありません。私などは、こうしてお側で食事のお世話が出来ることさえうらやましがられているのですよ。だから、どのような姫君かともう何人の人に聞かれたか数え切れないぐらいでございますよ」

郷子は、思った。

(この人が、きっと色が黒くて目がクリクリした男の子みたいな姫と触れ回ったに違いない)

郷子が、重員に見世物になるのは避けたいので三日月で裏口から密かに出立したいと相談したところ、重員もこの騒ぎをよく知っていて同意した。

郷子は、小柄な郎党から借りた直垂を着て、頭には侍烏帽子を被った。これで、この武士が男装の女子だと見破るものは、恐らく皆無だろう。

郷子は、小柄な郎党と一緒に宿屋の裏口から三日月に乗って静かに出発した。表門には、郷姫の出立を見ようと野次馬が人垣を作っていたが、誰一人郷子に気付いたものはいなかった。

夏の早朝の明るい日差しの中を疾駆すると、頬を掠める爽やかな外気が気持ちよかった。鎌倉街道の正面右手の丹沢山塊の上に、天頂に僅かに雪を残した富士が見えた。入間川の上流に見えた正にその富士に向かって進んでいるのだ。

郷子は、河越館から遥かに遠望するだけで、近づくことなど思いも寄らなかった霊峰に着実に接近していることが夢のようだった。

三日月がすこし疲れを見せたところで、餌をやって水を飲ませ、網代車が追いつくのを待った。

網代車に乗り込むと、志乃が直ぐに話し出した。

「出立の時は、もう大変。車の御簾を閉めていたのに、大胆な女が車に近づいて無理にも持ち上げて中を見るのですから驚いてしまいます。まさに傍若無人の振る舞いといしか言いようがありません。群集心理とでもいうのでしょうか」

「それで、見られたのですか」

「私を見た人は、きっと私が郷姫と誤解したでしょうね」

「それでは、『色の黒い目のクリクリした男の子のような姫』と言った、仲居は後で嘘つき

と呼ばれるでしょうね」

二人は、口を押さえて「ふふふ」と笑ってしまう。

「ところで、鎌倉についたら、御所の何処に大姫が居住しているのか調べて欲しいのです。寝殿の一室か北の対屋かのいずれかと思うのですが。私が母上に訊いてもいいのですが、後で母上がお咎めを受けることになっては気の毒なので、貴女にお願いしたいのです」

「判りました。比企谷殿には、かつて比企館にいた知り合いの侍女がいるのでそれとなく聞き出しておきましょう」

一行が鎌倉に近づくと、海潮の匂いがして、旅人や馬や牛車の往来が次第に賑やかになってきた。鎌倉は、北と東西を山に、南を海に囲まれた天然の要塞だ。

北の最奥地に鶴岡八幡宮が鎮座し、そこから頼朝が政子の安産祈願のために整備した若宮大路が海に向けて真っ直ぐに伸びている。御所は、鶴岡八幡宮の東側の大蔵郷に建てられているので、大蔵御所と呼ばれている。

御所ばかりではなく、いまや、鎌倉中の至る所で御家人や商人などの家の建築が行われている。道の整備など土木工事も行われている。

周りからは木挽きや釘を打つ音が聞こえ、大工や左官が飛び回り、建築資材の運搬で馬車が行きかい大変な活気である。

一行は、若宮大路の由比ガ浜側に近い一の鳥居の東側に位置する比企能員の屋敷である比企谷殿に到着した。この屋敷は、政子が頼家を出産するための産所になったところであるから、辺りの屋敷と比較してもひととき立派な造りである。

郷子と重員が、表門を入ると、直ぐに母の河越御前が迎えてくれた。幼い童子の手を引いている。この童子が頼家に違いない。母が乳母になってから二年ほど経つから、この童子は二歳であろう。母の後に隠れるようにして顔を覗かせている。武士の子供にしては、ひ弱な感じがするが、頼朝と政子は、この子を溺愛しているという。

「母上、無事到着いたしました」

「お母さま、お久しぶりです」

重員と郷子が二年ぶりに会った母親に懐かしそうに挨拶する。

「ご苦労様。二人が来るのを楽しみに待っていましたよ。さあ、疲れているでしょうから、湯を使って、その後直ぐ夕餉にしましょう」

「この童子が頼家さまなのですか」

「そうです。可愛いでしょう。とてもお利口さんで、最近はこちらの言う話も判るし、よく喋るようになったのよ。頼家さま、こちらが、叔父の義経さまのお嫁さんになる方ですよ」

郷子は、(頼家さまは、私の甥になるのだ)と思うとひととき親しみが湧いて、つい、頭をなでると、頼家は恥ずかしそうにしている。

「頼朝さまと政子さまが大変可愛がっていらっしゃると聞いています」

「そう、ついさっき、明日、頼家さまを愛でるためにこの屋敷を二人して御訪問されると

の連絡があったところですよ」

郷子は、危うく（大姫さまは？）と訊きそうになったが、じっと堪えた。

郷子が、湯浴みして一休みした後、重員と共に夕餉に呼ばれて大広間に入るとそこには比企尼を中心とする一族が揃っていた。

比企尼の隣に座っているのはこの屋敷の主人、比企能員である。比企尼の甥であったが、娘三人だけで息子のいなかった比企尼が猶子（養子）にして、家督を継がせている。母の義理の兄にあたり、郷子の伯父ということになる。頼朝の側近で信任が厚く、頼家の乳母夫を拜命している。乳母が母親代わりとすれば、乳母夫は父親代わりである。

母の河越御前は、一人でいるから、頼家は多分もう寝ているのであろう。

そして、安達藤九郎盛長とその妻の丹後内侍も顔を出している。丹後内侍は比企尼の長女で母の姉である。郷子からは、伯母とその亭主ということになる。

盛長は、蛭が小島で流人生活を送っていた頼朝の世話をしていた人物である。頼朝と政子の間を初めに取り持ったという噂もある。頼朝が挙兵した際には、以仁王の令旨をたずさえ頼朝の使者として東国の豪族を訪問し、取り纏めに奔走した。石橋山の戦いで、頼朝が敗走すると、頼朝と共に安房に逃れたが、そこで、下総の千葉常胤を説得して味方につけたという。鎌倉政権の功労者であり、頼朝の側近中の側近である。

また、盛長は、義朝の六男である範頼が遠州蒲御厨の藤原季成に密かに育てられていたのを探し出し、頼朝に引き合わせている。その縁であろうか、盛長の娘紗江は、最近範頼の正室になった。その紗江も、盛長の隣に座っている。郷子の従姉妹だから小さい頃にどこかで会ったことがある。夫の範頼は、いまは鎌倉を不在にしているようだ。郷子は、最近興入れしたこの従姉妹とじっくりと話してみたかった。

比企尼が、まず話し出した。

「遠路御苦勞様であった。だが、これから都まで上るのだから、まだ序の口に過ぎず、これからが大変であろうが、それでも、婿様のお待ちする華やかな京の都へ一歩一歩近づいて行く旅はそれは心踊る楽しい思い出になると思いますよ。ところで、今日はそなたの門出を祝うために久しぶりに一族に集まってもらいました。ただ、そなたの父河越太郎重頼は、義高惨殺に怒った木曾の親族が旗揚げするとの噂があり、頼朝さまの御命令で木曾に鎮圧に向かっているとのことであった。」

郷子は、急に心臓の鼓動が早まり、顔から血が引いていくのを感じた。

（父上が、頼朝さまの御命令で義高さま惨殺に怒った親族の鎮圧に向かっている・・・ということは、私が、義高さまの恋文を大姫さまに渡したことが万一露見したら、父上は頼朝さまから咎を受けることになるのだろうか）

郷子は、動揺を抑えられなかったが、しかし、懐にある文を服の上から押さえながら、（私は、義高さまの死の直前にこの文を大姫さまに渡すとお約束したのだ。必ずやり遂げてみせる）と心に決めた。

比企尼の話は、まだ続いている。

「三女安曇の夫伊東祐清は、気の毒なことをした。父の祐親が、娘の八重に子供を生ませた頼朝さまを殺そうとした時、身の危険を知らせて、逃がしたのに、頼朝さま挙兵後、平家方についたために、二人とも頼朝軍の捕虜になってしまった。頼朝さまは祐親を殺したが、自分を助けた祐清には恩賞を与えて逃がそうとしたのに、親孝行の祐清は、父に従うと断ったそうじゃ。おかげで、安曇は未亡人になってしまったが、近頃、平賀義信と再婚する運びとなった。平賀義信は、最近、武蔵守に任じられたと言うから、安曇にとっては、不幸中の幸いとも言おうか、人生塞翁が馬というか判らんもんじゃ」

郷子は、勇気を出して訊いてみた。

「頼朝さまは、自分を助けた人に恩義を感じるお方なのでしょうか」

「それはある。いま軍奉行をしている梶原景時殿がそうじゃ」

安藤藤九郎盛長が、話に加わった。

「石橋山の戦いで、御所さまが敗走して、森の中の洞窟に潜んでいた時のことだ。残党狩りをしていて平家側の梶原景時殿が洞窟に隠れていた御所さまを見つけた。御所さまが、もうこれまでと自決しようとした時、景時殿が『頼朝殿、お助け申す』と言った後、洞窟を覗き込もうとした部下の侍を阻止して『ここには誰もいない。他を捜せ』と大声を出したため、御所さまは九死に一生を得たのだ。その後、景時殿が、源氏軍に加わった際に、御所さまがその時のことを覚えていて、いま、軍奉行として重用しているのだ」

「ただ、その景時殿と義経殿とは、犬猿の仲ということではないですか」

比企能員が口をだす。

「そうだ。というのは、義経さまがこれほど戦上手だとは誰も予想できなかったからな。御所さまとしては、自分の弟の範頼殿と義経殿を自分の代官として、ただ、飾りの大将として表に立てておき、実際の戦は、軍奉行が作戦を立てて行えばよいという考えだった。範頼殿は、この方針にまさにぴったりだった」

郷子は、範頼の妻である従姉妹の紗江が気を悪くしているのではないかと、気遣って顔を見たが、何の表情も伺えなかった。

「ところが、義経殿は、軍奉行に相談するどころか、約束した戦闘開始日の前日に密かに一の谷に出発して、鶴越の奇襲をかけて成功した。景時殿は、虚仮にされたと怒り狂って、御所さまへの報告書で義経殿の悪口を書いた。おかげで、何に一つ戦果を上げられなかった範頼さまは、恩賞を受けたが、勝利の立役者である義経殿は何の恩賞も受けなかった」

「でも、義経殿が、一の谷の戦を勝利に導いた源氏の英雄であることは、都でも評判だというし、河越にいる私達でさえ知っていますよ」

重員が、疑問を呈する。

「そこよ。御所さまは、優れた為政者で理路整然とした報告書を好むのさ。

景時殿は、戦の開始から終わりまで、誰が何をしたか詳細な報告書を書いて、その日のうちに送った。なにしろ、戦闘の最中に報告書を書いていたと言うから用意周到よ。御所さまは、公平な信賞必罰で、家臣を心服をさせることが鎌倉政権の基盤確立のための最重要

事項と考えているから、このような報告者を必要としているのだ。

ところが、義経殿は、(平家に大勝利した)と書いた報告書を後日送っただけだった。

御所さまは、単なる噂や評判だけで評価するのを嫌っているからな」

郷子は、兄弟なのになすこし冷たい取り扱いではないかと感じた。

その感情を見透かしたように、盛長が付け加える。

「それと、御所さまは、義経殿があまり兄弟だという事を強調しすぎるのが不愉快なのに違いない。弟だから詳細な報告書は書かなくとも、自分が戦勝の最大の功労者であることぐらい兄は判ってくれるはずだという安易な態度が気に入らないのだな」

「それでは、なぜ弟を大將軍に抜擢したのでしょうか」

重員が、やはり疑問を呈する。

「それはね、東国武士団は五十以上の豪族から成り立っている。その内の誰を大將軍に抜擢しても、必ず他の豪族から不満が出るものよ。そのような状態で戦闘をしても、結束して一団となって戦えない。ところが、御所さまの代官として、源氏嫡流の弟を旗として纏めれば他の豪族から不満が出ないから不思議なものよ」

「それでは、弟君を特別扱いしてもかまわないではありませんか」

重員が、義理の弟になるはずの義経のために食い下がる。

郷子も同感だ。

「その疑問はもっともだが、微妙に違う。弟が御所さまに臣下の礼を取れば問題は無い。範頼どのは、御所さまを敬い弟というより、臣下として接しているから、御所さまの覚えもよい。ところが、義経どのは、兄弟としての甘えが先に立つから、御所さまは、そこが気に入らないのだ」

「私も、小太郎重房を兄として慕っていますが、他人行儀な臣下の礼など取りませんよ」

重員が、さらに食い下がる。

「普通の家族はそれでいい。しかし、御所さまは、鎌倉政権の棟梁だ。棟梁は一人だけだ。あとは弟であろうとみんな臣下でなくては、統制が取れなくなる」

「まあまあ、男の話はそれくらいにして・・・今日は、郷子と義経殿の婚約を祝う会なのに、その義経殿を厳しく攻めたら、郷子も心苦しかろう」

比企尼が、穏やかに座をとりなす。

「いやいや、郷子が義経殿の正室に入る前にこのことをよく知っておいて貰いたいから、あえて話しているのです。義経殿は、稀代の戦略家で戦上手。都の評判も上々で、源氏の人気を高めている。鎌倉政権においては、得がたき人材といえるだろう。ただ、義経殿が、鎌倉政権の基盤確立に添った形で動いてくれればいいのだが、その天分を違った方向に向けられると困ったことになる。郷子には、状況をよく理解して、義経殿を正しい方向に導いて欲しいのだ」

「義経さまが、その天分を違った方向に向けられるとはどういうことでしょうか。私にはよく判らないのですが」

郷子は、赫々たる戦果を上げ、世間的には源氏の評判を高めているにもかかわらず、鎌倉政権内では、もう一つ評価されていない義経に同情を禁じえない。

「それは、明日にでも、公文所の別当である大江広元殿から話があるう」

「この話は是で終わり。男たちには酒を、女は花嫁支度を見に行きましょう」

比企尼が、合図をすると下婢が食膳に載せた料理と酒を運び込んで男たちの前に並べた。

女達は、郷子のために準備した花嫁支度を見るために、次の間に移動した。

母の河越御前は、部屋の隅に置いた唐櫃を開けて中から色とりどりの桂、単衣、小袖、唐衣を取り出すと、衣装掛けに並べて掛けていった。正装する際は、これらの衣装の配色を色々組み合わせて重ね着することになる。衣装を並び終わると、鏡筥、櫛筥、搔上筥なども取り出して、床に置いた。

河越御前に促されて、郷子は衣装合わせをしたが、母親の目にくるいは無く、仕立てや色相は郷子の容姿に調和した見事な出来栄えであった。

比企尼と丹後内侍と河越御前が、食事をしながら頼家について、話し始めたので、郷子は、従姉妹の紗江に話しかけた。

「範頼さまと、挙式を上げられてからもうどれくらい御一緒に過ごされたのですか」

「嫁入りして一カ月も経たない間に、大手の大將軍として、平家追討で福原に出陣しました。でも、父盛長が、遠州蒲御厨の藤原季成に匿われていた範頼を探し出して、家に連れてきたときから、二年程、私が身の回りの世話をしていましたから、新婚という感じはしませんでしたね」

「一の谷の合戦で平家に勝利して、頼朝さまの御推挙で三河守に任じられたとか」

「それはいいのですが、世間一般では、一の谷の勝利は、義経さまの鴨越の奇襲で勝ったのに、範頼が恩賞を受けて、義経さまが恩賞を受けないのはおかしいと吹聴されています。範頼はそれを気にしているのですが、でも、先ほど父盛長が話していたように、頼朝さまのご意向ですから、いたし方ありません」

「頼朝さまは、範頼さまや義経さまをどのようにお思いなのでしょう」

「頼朝さまは、兄弟の母親の出自で、二人を下風に見ていると思いますよ。」

頼朝さまの母は、義朝さまの正室である熱田大宮司藤原季範の娘、範頼の母は、池田宿の遊女、義経さまの母は、九条院の雑仕女ですから」

「それで、範頼さまは、頼朝さまをどのように思っているのでしょうか」

「範頼は、母の出自の違いを素直に受け止めて、頼朝さまを敬っています。なにしろ、頼朝さまの前で話す時には、緊張のあまりどもるほどですから。それに、豪族などの有力な後ろ盾もない自分をただ単に弟というだけの名目で大將軍に抜擢してもらったことを感謝しています。貴族に匿われて育てられたものですから、戦は苦手ですよ」

紗江は、従姉妹という気安さもあるのだろうか三万騎を率いる大將軍である夫の範頼を単純素朴な亭主のように表現した。あるいは、頼朝さまのお声がかかりで嫁にいった紗江に範頼がすこし遠慮しているところがあるのかもしれない。紗江の口調には、あまり敬意が

感じられなかった。

郷子は、まだ会ったことのない義経という人物像を思い描いてみる。

(義経さまは、兄弟とはいえ、範頼さまとは、まったく違った性格の持ち主に違いない。義経さまは、母の出自など歯牙にもかけていないし、頼朝さまの前でどもるような男でもなさそうだ。まして、頼朝さまのお声がかりで嫁に行く私に遠慮するどころか、迷惑に感じているのかもしれない)

郷子は、入間川で見たカルガモの親子を思い出した。ある時は父ガモが母ガモを導き、またある時は母ガモが父ガモの先に立ち、あるいは並んで泳いでいる後をコガモが一列になって小さな足で必死に水をかきながらつき従っている風景。

範頼さまとならこのような家族になれるかもしれない。

郷子は、フーとため息をついて言った。

「まあ、いい旦那さまじゃない。うらやましいわ」

紗江は、それを聞くと先ほどの口調とは裏腹に嬉しそうに微笑んだ。